

Ⅱ、警察の捜査

一、

「おい、山岸君、事件だ。出るぞ、早くしろ」

「え？ 係長、何ですか？」

「本部からだ。新琴似町の田嶋電機というところで、人が刺されて倒れているらしい。一〇番通報があつたんだってよ。先に車に行っているぞ」

「わかりました。すぐ行きますから」

まったく、小便している際中だったのによ。小便がズボンに付いちまった。

山岸高志は、北札警察署刑事第一課強行犯係主任の巡査部長で、四年前に巡査部長昇進に伴って、赴任していた釧路警察署から異動になり、昔の縄張りだった札幌に戻って来ていた。今日は日曜日だというのに、二課の組事務所ガサ入れ応援に駆り出され、署に帰ってきたばかりだった。

「人が刺されて」と言った係長の言葉に、捜査への期待感を感じ、山岸は下腹に力を入れて小便のスピードを速めた。小便の後で手を洗う暇もなく、手に着いた飛沫をズボンの尻に擦りつけながら、階段を飛び下りて玄関に向かう。メタリックグレーのクラウンの助手席には、山岸が小便をしているのを何故か知っていて、便所まで呼びに来た刑事第一課強行犯係の係長で、山岸の直属上司である警部補の桜木将司が正面を向いて座っていた。運転席には、山岸の部下で、同じく強行犯係の巡査長新田啓介がハンドルに手を置いている。今にも動き出しそうな気配だ。小便の終りのほんの七、八秒しか遅れていないというのに、桜木係長は、山岸が遅れてきたことに不満があるかのような顔つきでこちらを振り向いた。後部座席に乗り込んで、扉を閉める音が鳴らないうちにクラウンが滑り出した。

「新田君、道道八六九に入って石狩方面だ。現場は石狩市の手前だからな」

桜木係長が、前方を指差して新田に指示をしている。

「了解です」

新田がサイドミラーを見ながら答えた。

北海道の日本海側に位置する石狩市は、平成十七年に厚田村や浜益村が編入合併されたうえ、札幌市の人口が平成二十年に百九十万人を突破したことで、札幌市の衛星都市として大規模な住宅街が形成されてきている。これに伴い、石狩市に接する札幌市北郊地域の治安強化を目的として、札幌方面警察署管内の二十八番目の警察署として、北札警察署が、石狩市に近い石狩街道（国道二三一号）沿いに十年前に設置されていた。

桜木係長が窓から手を出してルーフに取り付けた赤色灯が回り始め、サイレンの甲高い音と共に、クラウンが北札署の門から石狩街道に飛び出した時、山岸は後部座席から身を乗り出して桜木に聞いた。

「係長、新琴似町のどこですか？ 倒れているって、死んでるんですか？」

そこに、殺人事件・迅速捜査・早期逮捕の図式を期待している自分が居た。

「新琴似町の二十条五丁目の田嶋電機という所らしいんだが、その社長が、会社の中で刺されて倒れているという通報だ。死んでいるのかどうかは行ってみなきゃ分らないな」

「一一〇番の通報は誰なんですか？」

「その会社の従業員らしいな」

「ということは、その従業員は現場に居るということですね？」

「まったく、この雨の中で・・・」

係長は、通報者が現場に居るということは当然だというように、その質問には答えず、車の外で雨粒が横に走るのを見ながら顔をしかめた。桜木係長は、山岸より八歳年上の四十三歳で、一年前に帯広署から北札署に来た。道東ではよく見かけるキタキツネのような鋭い目をしている。

クラウンが北札署を飛び出してから五、六分で道道八六九号との交差点が見えてきた。後、数分で現地に到着するだろう。

瞬きするほどの短い春が過ぎ、夏が駆け足でやって来たばかりの六月二十八日だった。午前中から降り始めた雨で、ところどころ水溜りになっているアスファルトに、前方の青信号が揺れて映っている。道道八六九号は石狩と札幌を結ぶ幹線道路の一つで、車の通行も、平日は石狩埠頭へ向かうトレーラーや石狩市からの通勤のため札幌市内へ向かうマイカーが多く、朝夕の通勤時間帯にはやや渋滞気味になる。しかし、この日は日曜日であり、しかも雨天のため、車の通行も少なめで、傘をさして歩道を急ぐ人の姿も疎らだ。

クラウンは、雨を蹴散らして交差点を左折し、通行中の車をサイレンで威嚇しながら、道道八六九号線を北西に向かって突っ走り、石狩市との境界付近で脇道に入った。五十メートルくらい走り、砂利道になってすぐに、田嶋電機（株）と書かれた錆びた看板のある二階建ての社屋が目に入る。開け放たれた玄関が視界の中で大きくなってきた。車が止まると同時に、今度は山岸が最初に車から飛び出る。小走りですぐに駆け込んだのは、雨に濡れたくないというのが一番の理由だが、誰よりも先手を取りたいということだ。ただし、急いでもいい視野の隅には、一台のミニパトの他に、ボディに田嶋電機と書かれたこの会社のものらしき古びたライトバンが二台、それ以外に、乗用車二台が砂利敷きの駐車場に止まっているのを捉えている。二代の乗用車のうち一台が通報者であるという従業員のものであるとすれば、もう一台の乗用車は被害者のものだろうか。

玄関の中には、既に到着していた近くの交番の制服警察官一名が立っており、後ろには、通報者であろうと思われる小柄な中年男が、緊張した面持ちでこちらに視線を送っている。救急車のサイレンの音が聞こえる。救急隊員が間もなく到着するだろう。奴らに現場を乱される前に、被害者の状態を確認しておかなくてはならない。

玄関に居た中年男の横を通り過ぎる時、「社長が、社長が」と言うかすれ声が聞こえた。山岸は頷きながら男を一瞥し、次に、玄関の様子や事務所内の様子を睨んだが、特別な違

和感はない。

「新田君、その人から発見した時の状況を聞いておいてくれ」

山岸は振り向かず、後ろから来ているであろう新田に声をかけた。

「現場はどこだ？」

若い警察官の顔を見ると、彼は事務所内の一角を指さした。警察官の表情には必要量の何倍もの緊張感があふれ、「あそこです」と言葉が出てくるまでには、もうひと呼吸を待たなくてはならないようだ。